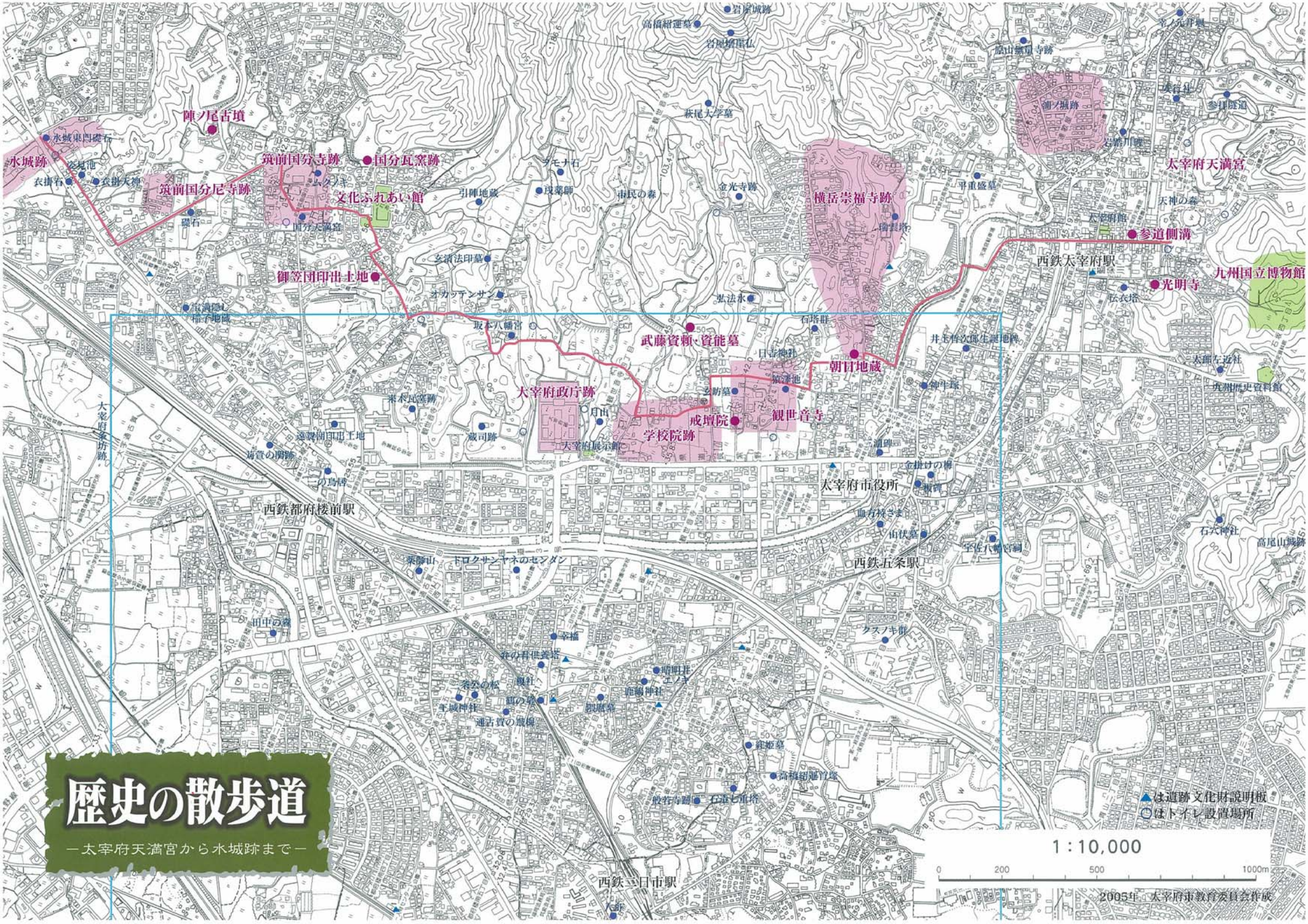
歴史の散歩道
―太宰府天満宮から水城跡まで―
▲は遺跡文化財説明板
○はトイレ設置場所
1:10,000
0
200
500
1000m
2005年　太宰府市教育委員会作成
陣ノ尾古墳
水城跡
水城東門礎石
姿見池
衣掛石
衣掛天神
筑前国分尼寺跡
筑前国分寺跡
国分瓦窯跡
文化ふれあい館
国分天満宮
礎石
御笠団印出土地
宝満隠し
稲子地蔵
玄清法印墓
オカッテンサン
坂本八幡宮
武藤資頼・資能墓
大宰府政庁跡
月出
戒壇院
学校院跡
観世音寺
朝日地蔵
横岳崇福寺跡
金光寺跡
引摩地蔵
段菊師
市民の森
萩尾大字墓
岩屋城跡
高橋紹運墓
岩屋城屋仏
風山紙屋寺跡
浦ノ城跡
岩蔵川渡
参道側溝
太宰府天満宮
天神の森
太宰府館
西鉄太宰府駅
光明寺
九州国立博物館
仏衣塔
瑞雲塔
平重盛墓
弘法水
石塔群
日吉神社
紫雲池
玄昉墓
井上唐次郎生誕地碑
太郎左近社
九州歴史資料館
牛塚
栗木瓦窯跡
蔵司跡
大宰府展示館
遠賀郡印出工地
大宰府政庁跡
鴻臚の碑跡
の鳥居
西鉄都府楼前駅
太宰府市役所
金掛けの梅
板御
血方様さま
由伏墓
空海八幡宮祠
西鉄五条駅
石六神社
高尾山城跡
栗柳山
トロクサンヤネのセンダン
田中の森
クスノキ群
幸橋
発の暮供養塔
奈良の松
模社
鶴の塔
鹿嶋神社
牛城神社
連古賀の飛梅
殿塚墓
紀姫墓
高橋紹運首塚
般若寺跡
石造七重塔
西鉄三日市駅

# 歴史の散歩道 -太宰府天満宮から水城跡まで-

## 【太宰府天満宮】

菅原道真は901年大宰府に左遷され、2年後に亡くなった。天満宮はその墓の上に建てられたものと伝えられている。その後古代から近世にかけて隆盛を極めた。かつては「天満宮安楽寺」と呼ばれたこともあった。現在の本殿は1591年に建築されたものである。

## 【太宰府天満宮参道側溝跡】

江戸時代に描かれた天満宮の絵図には、参道が北側にやや広く描かれている。それを物語るように、現在の参道より4mほど北側の店舗の下から、当時の側溝と考えられる石組みが見つかった。

## 【光明寺】

この寺は鎌倉時代中期に円爾弁円の門下であった鉄牛円心によって開山された。天神様が中国へ渡って禅を学んだという渡宋天神ゆかりの寺院である。菩寺としても知られ、境内には昭和32年に作られた枯山水の美しい庭園がある。

## 【九州国立博物館】

「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」という視点で、平成17年10月に全国4番目にできた国立博物館。地下2階、地上5階の内部は大きく特別展示室、文化交流展示室、収蔵庫、博物館科学・修復エリアに分かれ、他の博物館にない「生きている博物館」を実践する。

## 【朝日地蔵】

横岳崇福寺を創建した湛慧が、鬼すべの鬼にされ憤慨し、穴に籠もってしまった。ここは読経をしながら息絶えてしまった湛慧を手厚く葬り祀ったところと伝えられている。現在も信仰の場になっている。

## 【横岳崇福寺跡】

鎌倉時代初期に湛慧によって創建された寺院である。その後大応国師を迎えるなど隆盛を極めたが、天正14(1586)年の岩屋城の戦いの兵火により伽藍のほとんどを焼失した。江戸時代になり、黒田藩によって博多千代町に移されたが、旧境内には勝禅院や大応国師の墓などが残されている。

## 【観世音寺】

観世音寺は、筑紫で亡くなった母帝斉明天皇の供養のために天智天皇が建立を発願したもので、約80年後の天平18(746)年に完成している。建物には、五重塔・講堂・金堂・大門・中門などがあり、さらに西に戒壇院、東に菩薩院を配した伽藍であった。「府の大寺」といわれた西国随一の寺院であったが、現在はわずかな礎石と日本最古の梵鐘や巨大な仏像が残るのみである。講堂・金堂は江戸時代に黒田藩による再建。

## 【戒壇院】

奈良県の東大寺、栃木県の下野薬師寺とならび、天下の三戒壇のひとつとして、761年に観世音寺に置かれた。戒壇とは戒律を授けるところのことで、受戒によりはじめて正式な僧尼として認められた。江戸時代に建築された本堂や鐘楼などは県文化財に指定されている。

## 【武藤資頼・資能墓】

資頼は関東の武士で、源頼朝の信任厚く、九州に下り太宰府の支配を進めた。1226年大宰少弐に任ぜられ、1228年に69歳で没した。資頼の墓と伝えられる五輪塔は一石隅切の珍しい石塔である。

資能は資頼の子で1258年に大宰少弐となっている。1281年に蒙古合戦の傷がもとで、84歳で没したと伝える。資能の石塔は、明治時代に崇福寺の旧境内にあった横岳で発見されたものである。

## 【大宰府学校院跡】

学校院は奈良・平安時代における官吏養成の教育機関で、中央には大学・典薬の両寮が、地方には国学が置かれ、大宰府には府学が置かれた。「職員令」によると府学には博士1人が置かれたが、のちには音博士・明法博士が増員されている。府学の学生は管内6ヶ国の出身者で、781年には医生・算生200余人であった。発掘調査では奈良～平安時代の掘立柱建物、井戸、溝などの跡が検出されたが、建物の用途は未解明。

## 【大宰府政庁跡】

大宰府は西海道(九国三島)諸国を統括し「遠の朝廷」と呼ばれていた。政庁は発掘調査によって、3時期の建物跡が確認された。最も古いものは7世紀代のもので、現在見ることができる礎石は、941年の藤原純友の乱によって焼失した後に再建されたものであることがわかった。しかし、政庁は11世紀後半代にはその機能を失っていたものと考えられている。

## 【御笠団印出土地】

御笠団印は、701年の大宝令に定められた軍団の印である。軍団とは外国の脅威への対処とともに国内の治安維持のためにつくられたものである。印は高さ5.2cm、縦4.2cm、横4.2cm、印台の高さ(周縁で)0.93cm、紐は幅2.4cm、厚さ1.15cmを測る。この印は、1927(昭和2)年4月8日、桑畑で発見されたもので、現在東京国立博物館に収蔵されている。

## 【文化ふれあい館】

平成8年に開館した「歴史の散歩道」のガイダンス施設である。1階の展示室では、考古・民俗・文化をテーマにした展示が行われ、2階では発掘調査の整理や市史編纂作業を見学することができる。屋外には文化ふれあい館のシンボルとして筑前国分寺にあったとされる七重塔の10分の1の復元模型がある。

## 【国分瓦窯跡】

筑前国分寺の瓦を焼いたといわれる窯跡で、1969年当時で9基が確認された。現在は崩壊が進み、わずかに3基残っている。窯跡は地下式有階無段登窯で、高さ1.5m、間口1.5m、奥行5.3m。焚口付近は一部崩壊している。窯体は長さ約40cm、幅約30cm、厚さ9cmのスサ入り粘土の日干レンガをアーチ状に積み上げて造られている。

## 【筑前国分寺跡】

天平13(741)年、聖武天皇の詔により鎮護国家のために全国に造られた国分寺のひとつ。その伽藍配置は、中央に金堂、北側に講堂、南東の一角に塔、南側に中門・南門を配し、中門と金堂を回廊で結んでいる。塔の基壇は瓦積みで、一辺が約17.4m、高さ1.5mの規模を持ち、その中央に巨大な心礎が残っている。

## 【陣ノ尾古墳】

6世紀末頃に造られた直径約12mの円墳。内部は南側に開口する複室構造の横穴式石室で、全長6.6mを測る。石室からは馬具や耳環などの副葬品が出土している。市指定史跡。

## 【筑前国分尼寺跡】

国分寺と同時期に建立されたとされる尼寺跡で、この場所では、8世紀後半から約100年間という短期間存続していたと推測されている。江戸時代の『筑前国続風土記』には約20個の礎石の存在が記されているが、現在2個の礎石が現存し、1個が尼寺跡近くの国分共同利用施設に移設されている。

## 【水城跡】

663年白村江の戦い敗戦後に、大野城や基肄城とともに造られた防御のための土塁である。全長1.2km、高さ10m、幅80mの土塁の前後には濠が造られ、それらを繋ぐ木樋という導水施設が確認されている。